

募集中

衣笠の新しいおはなし

なまえ ぼしゅうちゅう  
キツネの名前 募集中

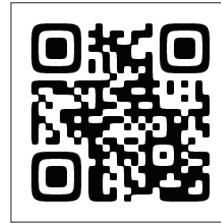


キツネのお話をつくりました。

きぬがさ う か こ しあわ  
衣笠で生まれ変わったキツネの子、みんなの幸  
せを願いながら、今でも衣笠で暮らしています。  
みなで、キツネに名前をつけてあげましょう！

## キツネのなまえ 応募方法

### ● インターネットで



ponponsuke.org/?p=66

### ● ハガキで

氏名 / ペンネーム / 年齢 / ご職業・所属団体名 / 住所 / キツネの名前 / メッセージ  
を明記の上、  
宛先「〒238-0031 横須賀市衣笠栄町1丁目70  
三雄堂書店「キツネの名前」係」までお送りください。  
往復ハガキで送っていただくと、当選などの続報をご返信いたします。

締切：2022年9月30日（金）まで

横須賀 衣笠、オリジナルの九尾の狐のお話  
不思議なキツネ ○○○のおはなし

<https://ponponsuke.org> →



企画 三雄堂書店

2022年6月20日（2）版

キツネが振り向くと、そこにはひとりのおじいさんが立っていました。

「わたしは生まれたばかりで、なにもわかりません。おじいさんは、わたしが誰か知っているのですか？」

それを聞いたおじいさんは、にっこり笑ってこういいました。

「そうかそうか。何もわからぬか。ならば、わしと一緒に暮らそう。わしの名は三浦大介義明。みんなおおすけさんと呼ぶから、お前もそうすればよい」

おじいさんの正体は、死んだ後、神霊になっていた三浦大介だったのです。

おおすけさんの優しい言葉にキツネはたいそう喜んで、それから二人は一緒に住むようになりました。

おおすけさんは、キツネを○○○と名づけ、衣笠城につれて帰りました。そして、衣笠の周辺に住む人たちの幸せを、陰ながら見守ることを教えました。

それからまたまた長い年月が流れましたが、今でもおおすけさんとキツネの○○○は衣笠の人々を守っているといえます。

○○○は時々人間の姿に化けて、商店街でお買い物をしているそうですよ。

おしまい

# ふしぎ 不思議なキツネ ○○○のおはなし

さく・いしだみお

むかしむかし、天皇さまが京の都に住んでいたころのお話です。

遠い遠い外つ国から、とても強い妖力を持った化け狐がやってきて、日本を滅ぼそうとする事件が起こりました。

悪だくみに気づいた都のえらい人たちは、化け狐を退治するため日本中から強い武者や陰陽師を集め、討伐隊を結成することにしました。その中のひとりに選ばれたのが、衣笠城に住んでいた三浦大介義明でした。

「三浦大介よ、お前は特に武勇に優れている。討伐隊の隊長として、みなを率いてくれ」

「はっ！ おまかせください！」

得意の大弓を手に、義明は力強く答えました。

そんな様子を知った化け狐は大あわてです。

「あいつらは強い。このまま都にいたら、退治されてしまう」

そこでこっそりと都を抜け出し、東国へ落ち延びていきました。

ですが、ここで逃してしまうと、またどんな悪さをするかわかりません。討伐隊は化け狐を追跡し、しもつけのくにげんざいどちぎけんなすのひつ下野国（現在の栃木県）那須野でようやく追い詰めることができました。

「おのれ、討伐隊め！ 我が力を思い知れ！」

死にものぐるいの狐は、妖術を使って抵抗します。

討伐隊は一騎当千の兵が揃っていたものの、化け狐の力はあまりに強く、苦戦を強いられていました。

「このままでは埒が明かぬ」

討伐隊の人々が困り果てた、そんな時です。

「おのれ、化け狐。我が矢を受けよ！」

義明は気合を込めて弓を引き、矢を射掛けました。

すると、その矢はみごとキツネの首と脇腹を貫いたではありませんか。

さしもの化け狐もこれはたまりません。

ひるんだところに房総の武士・上総介広常が襲いかかり、止めを刺しました。

こうして化け狐は無事退治されましたが、殺された化け狐のくやしい思いだけは消えずに残りました。

「口惜しや、たとえこの身は滅びても、おぬしらを恨む心は滅ばぬぞ！」

すさまじい怨念は石になって凝り固まり、すべての生き物を殺す毒の気を吹き出し始めました。そのため、人も動物も鳥も那須野に近づけません。石はいつか「殺生石」と呼ばれるようになり、那須野は、生き物の気配ひとつない、荒れ果てた地になってしまいました。



それから長い年月が経ったある日のこと、那須野

に一人のお坊さんが現れました。

玄翁和尚という、とても徳の高いお坊さんです。

玄翁和尚は、死んでもなお毒をまきちらして人々から嫌われている化け狐をかわいそうに思い、成

仏させてやろうと考えました。

「化け狐よ、今こそ恨みの心を忘れるのだ！」

我が身の危険も顧みず殺生石に近づくと、大きな金槌で「えいや！」と石を打ちました。

すると、石は粉々に割れ、石に宿っていた怨念もきれいさっぱり砕け散りました。勢いよく弾けた

破片は、日本国中に飛び散りました。

この衣笠の地にも、ひとつ。

けれども、それに気づいた人は誰もいませんでした。

それからまた長い年月が流れました。

ある日のことです。

突然破片がぐるぐると回転し、パキッと割れたかと思うと、小さな小さなキツネが生まれました。

「ここは、どこなの？」

キツネは不思議な力を持っていましたが、まだ生まればかりの赤ちゃんなのでどうしたらいいかわかりません。

ただただ、途方にくれるばかりでした。

そんな時です。

「おや？ お前はもしかしたら那須野の化け狐ではないか？」